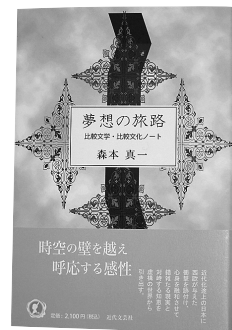


森本真一著

『夢想の旅路』

―比較文学・比較文化ノート―

宮脇俊文



2009年8月20日発行
近代文芸社
B6判 314頁
定価 2000円(本体)

文学者の思念を求めて

僕がはじめて森本さんに出会ったのは、大学に入学してまもなく行われたオリエンテーション・キャンプの時だった。大学生になったばかりで、まさに希望を胸にいっぱい膨らませていた頃だ。彼は上級生として新入生の面倒を見てくれる役割を担う一人だった。そして、たまたま僕の乗ったバスの担当だった。最初の印象はとても面白い人というものだった。しかし、同時に何をするにもとにかく一生懸命の人であった。人を笑わせるときも必死で頑張るタイプなのだ。面倒見のいい先輩。誠実という言葉がぴったりの人。そんなことが今も脳裏に焼き付いている。

卒業後、何度か学会等でお目にかかったことがあるが、森本氏の人柄は昔のままだった。彼の授業風景を拝見したことはないが、おそらく現在も、かつてわれわれ後輩に接してくださったのと同様に誠意を持って学生の指導にあたられているのだろうと推測する。冗談を言うときも真顔で真剣に。

今回、森本氏の著書を見つけて思ったことは、彼の人柄がそっくりそのままそこに反映されていることであった。研究対象に関して、決まっていなかげんな取り組みをすることなく、細部にいたるまで、納得のいくリサーチをされた上で論を展開されていると思った。時々少し強引な論の展開も見受けられるが、それもまた彼らしい感じがした。

大学時代のエピソードを一つ紹介したい。それは森本氏のノートの取り方に関するものである。当時若手のある先生が、授業中だったか、終わってからだだったかははっきり思い出せないが、森本という学生のノートを一度見せてもらうといいよと言われたことがある。それは小さな字で丁寧にしりと埋め尽くしていたのだそうだ。確か一行に二行分の文字が書かれていたのだそうだ。さらに、卒業に必要な単位数を30単位以上もオーバーして卒業されたとも聞いている。こうしたことも彼の著書の行間から見えてくるような気がする。

さて、御著書『夢想の旅路』に関してであるが、なんとシェイクスピアから渡辺淳一までが論じら

れており、落語まで挿入されているという内容である。このように扱われている分野があまりにも多岐にわたるため、ここですべてをカバーすることは残念ながらできない。そこで、中からいくつか興味の共通するものを取り上げて、感想を書かせていただくことにしたいと思う。

まず最初は、『おもしろうてやがて悲しき』一九二〇年代とその後』について。この章ではフィッツジェラルド、そしてヘミングウェイが扱われている。この二人は「失われた世代」と呼ばれる二〇年代を代表する作家たちであり今さら説明の必要もないと思われるが、森本氏は作品を細かく引用しつつ、この時代の特性を丁寧に描写している。そこまでは特になんの驚きもないのであるが、このあとなんと日本の横光利一が登場するのである。一見唐突な感じがするが、読み進めるといかにも比較文学者らしい視点で見事にこれらの作家を繋いでいる。少々突飛な部分も見受けられるが、次の部分を読めば森本氏の言わんとするところは納得できそうな気がする。

『日はまた昇る』の巻頭には、パリに住んだアメリカの女流作家ガートルード・スタインの「あなたたちは皆迷える世代です」という言葉が記されていて、ヘミングウェイやフィッツジェラルドたちはしばしば「迷える世代」と呼ばれるのだが、戦争による打撃の後遺症を背負って彷徨を続けていたという側面からは彼らを「旅愁の世代」と名付けることもできよう。横

光が『旅愁』で芭蕉から借りた「おもしろうてやがて悲しき鶴舟かな」の一句は、未曾有の好況を呈した一九二〇年代から大恐慌を経て三〇年代に入ったころのアメリカの世情を言い当てている気もする。死に瀕した芭蕉は「旅に病んで夢は枯れ野を駆け巡る」と詠んだ。洋の東西と時代を問わず、現実の背後と人の心の奥底を見据えて旅する文学者の執念は凄まじい。

次に、『やがて哀しき外国語』というエッセイ集の著者である村上春樹についての章に移りたい。「村上春樹と比較文学者の触手」と題されたこの章の前半は、フィッツジェラルドと村上の関係について書かれている。それぞれの作家の短編、「冬の夢」と「今は亡き王女のための」の比較考察が試みられているが、後者が前者を下敷きにして書かれたものであることは、まず間違いないだろう。このことを指摘した上で、著者は次のような一つの結論を示している。これが森本氏の比較文学研究への姿勢をうまく言い当てているようだ。

自分を含む多分に制御の利いた三人の男女の絡みを作品に仕立てた村上は、第一次世界大戦後の狂乱の渦中においてその渦の原動力だった観さえあるF・スコット・フィッツジェラルドとは、ほぼ正反対の性格を帯びていたと考えてよいかも知れない。しかし・・・フィッツジェラルドも自らの来し方やアメリカの実情を客観的に見据えた文章を書いている。村上とフィッツジェ

ラルドはかなり深い所で相似しているとも考えられる。ある作家が他の作家に、もしくはある人物がほかの人物に引き付けられたり嫌悪を覚えたりするのが何故なのかは、往々にして本人にすら理路整然とは弁じにくい不可思議な問題なのではないだろうか。男女関係の機微も恐らくその辺りから生じると察せられる。そして比較文学が扱うべきことの一つは近しさおよびよそしさ、好意と反発の微妙な交錯ではあるまいか。

この章の後半は村上とフォークナーの関係についての考察に割かれている。まずは前者の「納屋を焼く」と後者の「燃える納屋」の比較考察に始まり、その他多くの作品への言及が見られるが、中でも『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と『野生の棕櫚』の類似性の考察には興味を引かれる。ここで森本氏は「過去が現在に及ぼす影響や記憶の重視はフォークナーと村上の顕著な共通点と考える」としているが、まさにその通りだろう。また、著者は「実情とは隔たったことに思いを巡らせてそれを理想化し、既に費えたものに拠り所を求めるのもフォークナーと村上春樹が共有する特性ではあるまいか」と両者の共通点を挙げているが、この点に関してもまさにその通りであろう。

さらに、著者は『ダンス・ダンス・ダンス』に触れて、「村上がドルフィン・ホテルの一角の濃

密な闇に込めた思いは、恐らくフォークナーが消え去ろうとする大森林に馳せた夢と通底していると推察できる。近代的な功利性に人の心が蝕まれることへの彼らの憂慮は深そうだ」という読みにも鋭さが見られる。

そして最後に、『羊をめぐる冒険』には「わが国の表層的で性急で偏狭な西欧化への村上の鋭い批判」が見られるとしている点にもうなずけるものもある。村上の短編に「駄目になった王国」というのがあるが、それは「現在の日本にはかならないのではないかとも思えてくる」と森本氏は締めくくっている。実に多彩で興味深い考察の溢れた章である。

以上、本書のうちのたった二章を取り上げたにすぎないが、それだけでもわかるように、森本氏の視野は実に広い。これだけの数の作家と作品を扱うと、得てして広く浅くになりがちだが、どれもみな深いものばかりだ。さらに後書きにある「時空の壁を越えて飛び交う文学者の思念を追いつめ、あやなす言葉に魅せられつつ辿る夢想の旅路に、生ある限りこの身を置いていたい」という姿勢は全編に貫かれている。森本氏の研究者としての姿勢に拍手を送ると共に、狭くながちな評者の視野のことを思っ反省しきりである。

(みやわき としふみ 成蹊大学教授)